

【一般口演2】 第6席

凌雲の鍼法について

東京 北江 龍也

凌雲は明代の鍼灸家である。字は漢章、臥岩と号した。帰安県双林鎮（今の浙江省呉興）の人である。成化年間（1465～1487）に鍼術に優れ、その名をほしいままにした。その人となりは義侠心に厚く、人が病むを見ればわが身も痛み、迎えるものあれば深夜風雨といえども、急ぎ駆けつけた。鍼術を施せば、様々な病はすっかり癒え、毎朝門を開けば、病人が待つこと数百人を数えたという。貧しいものからは代価を欲せず、ゆえに死して家に資産は無かったという。

弘治年間（1488～1505）に召されて京に入り、医官に術を授けた。『経学会宗』『子午流注図説』『流注弁惑』などを著すも、後2書は伝わらない。卒年77歳。最近の研究によると、その生没年はおよそ1443年～1519年とされる。

凌雲の法を伝える道統は、凌雲派もしくは双林派と称され、鍼術をよくしたという。その子孫からは歴代名医を輩出したが、凌雲派の鍼法の全貌を伺うことは今や困難である。なぜなら凌雲の鍼術に関する事跡は史書に散見されるも、その著作はほぼ失われてしまったからである。

凌雲の著作として比較的知られる書に『経学会宗』がある。本書はかつて刊行されたことはなく、現在披見できるのは南京図書館所蔵の手抄本、および凌氏の子孫が伝える手抄本である。また清の道光初年（1821年）ごろの手抄本、江上外史撰『鍼灸内篇』、さらに清の康熙（1662）以前の手抄本、著者不詳『凌門伝授銅人指穴』の2書は凌雲派鍼術の道統を承けるものだという。また清の康熙年間に著されたと考えられる、巖振識語を付す『循経考穴編』は凌雲の書を引いたものとして参考に値する。

郭世余編『中国鍼灸史』によると、「陳会（『神応経』を著したとされる明代の鍼灸家）の補瀉法と凌氏の伝える法はほぼ同一の流派に属す鍼法である」とある。実はこれは『鍼灸内篇』の言を承けたものであるが、もしも『神応経』と凌雲に関連があるのなら、興味深い事実と言えよう。

今回の発表では主に上記4種（『経学会宗』『鍼灸内篇』『凌門伝授銅人指穴』『循経考穴編』）の資料を用い、それぞれの書に評価を下し、凌雲派の失われた鍼法を考察する。